

後漢光武帝と儒教的讖緯

——莽新末後漢初の政治情勢から——

三 浦 雄 城

はじめに

古代中国の政治思想において儒教が一尊の地位を占めるようになったのは漢代である。漢代では経学の発展とともに予言的性質をもつ「讖」と釈経的性質をもつ「緯」が出現し（以下、「讖緯」と総称）、皇帝権力と結びつくようになった。

讖緯と皇帝権力の関係について、西嶋定生氏は、儒家官僚の進出によって儒家思想が整備されることで国家の祭祀儀礼も改革され、さらに儒家思想が讖緯説と結合して皇帝観をその教説の中にとり入れることで儒教は国教化した、とした。この功績は王莽に帰せられる。⁽¹⁾これに対して板野長八氏は、王莽の用いた讖は「経なるもの・孔子のなせるもの」ではないと考え、経書や孔子に関わる凶讖に従って光武帝が挙兵・即位・封禅等を行ったことで、儒教は凶讖が君主以下全人民を指導し教化する国教となった、とする。⁽²⁾これを受けて保科季子氏は、板野氏の説を批判的に発展させ、凶讖を「凶」＝天の下した河凶洛書「讖」＝「凶」「経」の解説」と区別し、河凶洛書による

光武帝の受命は経・讖の記載をその根拠とすることで経学的に正統性を保証されたと考え⁽³⁾。その他、陳蘇鎮氏は、光武帝の利用した讖緯書『赤伏符』を元々は孔子が劉邦の受命を予言するものとして作成されたものと考え、光武帝やその群臣による利用は付会であって『赤伏符』の本意ではない、と指摘する⁽⁴⁾。

以上のように、王莽が孔子や経書と関わる讖緯（以下、「儒教的讖緯」と仮称）を利用したことについて、板野氏や保科氏は否定的な立場を取る。板野氏は、王莽は本来の孔子教や経に基づく道徳的な権威と天に基づく呪術的・神秘的権威とを併せた複合的な武器として利用したが、いまだ一本化されておらず、そこに幼稚さが見られると評価⁽⁵⁾し、保科氏は、王莽は天が作った受命の書を偽造し続けるばかりで、それを儒教と結合させるまでには至らなかった可能性を想定する⁽⁶⁾。確かに王莽が即真に利用した符命に河図洛書や経書の名を冠する緯書は確認できない。一方で、緯書の成立は一般に前漢末期とされているため、西嶋氏が着目した内容をもつ緯書が王莽期に存在した可能性はある。西嶋氏自身、そうした緯書を王莽が利用したかは問題にせず、儒家思想が緯書の中で皇帝観念を包摂したことに注目する。

このように、讖緯をめぐる問題は少なくとも、①讖緯思想の形成、②形成された讖緯思想の書籍化、③讖緯書の利用という三点が論点となり得る。③に関わるものに黄復山氏の議論がある。黄氏は、光武帝の利用した緯書『河図赤伏符』が即位儀礼の祝文中では「讖記」とされ（本紀一上光武帝紀上）、封禪の刻石文で初めて書名が見えること等を理由に（『統漢書』祭祀志上）、即位後の河図讖校定で「讖記」が『河図赤伏符』と名付けられたとする⁽⁷⁾。このような指摘は、即位時と封禪時とで光武帝の利用した河図讖の性質が異なっていた、つまり即位当時の河図讖は緯書ではな

く封禪時の図讖は緯書となっていた、という可能性に目を向けさせる。⁽⁸⁾「讖」という語は古くから用いられ、必ずしも孔子や経書と関わるものではない。こうした讖が何時頃から如何に儒教と結びついたものとして利用されたのかという問題は、両漢期の讖緯と儒教、それらと皇帝権力との関係を検討する上で重要な視点となる。

そこで本稿は、光武帝が何時・如何に讖緯書を儒教と関連するものとして扱ったのか、その時期と扱い方が意味するものは何かを考察したい。

なお、本稿では史料や先行研究の用語に従って論述する場合を除き、讖緯を記載する書の総称として「讖緯書」を、讖緯書のうち河図緯・洛書緯四五篇と七経緯三六篇からなる緯書八一篇の総称として「緯書」（『尚書中候』を含む）⁽⁹⁾を使用する。また、便宜上即位の前後を問わず劉秀を光武帝と表現し、范曄『後漢書』引用の際は書名を省略する。

第一章 「孔丘秘経」説と新末の讖緯

儒教的讖緯が史料上に見えるのは何時からか。板野氏によれば、前漢成帝期に甘可忠等が献上した「赤精子之讖」⁽¹⁰⁾が、孔子とは関わらないものの最も早い経なる讖である。しかし、「経」と名乗る書籍には「四時五行経」（漢書卷三〇芸文志術数略五行）等の経書とは直接関わらない書も存在し、かつ「赤精子之讖」は劉歆から「五経に合はず（不合五経）」と批判されているため（同書卷七五李尋伝）、これを経書と関わる讖と見てよいかには疑問が残る。

板野氏が「赤精子之讖」に次いで指摘するのは「孔丘秘経」である。「孔丘秘経」とは、後漢の建武三年（二七）⁽¹¹⁾

に劉歆の兄子・龔の南陽襲撃を制止すべく蘇竟が送った書簡に見える言葉で、類似表現が新末の邳惲の上書に見える。安居香山氏は、李賢注を踏まえ、「孔丘秘経」とは孔子の作った緯書であり、王朝交替の時期が著され、また漢家の制が述べられ、その文は微隠だが甚だ明瞭あるものとまとめ、同注は緯書の本質的内容をついている、と評価する。そして、孔子の緯書作成という考えの前提には公羊学の孔子素王説があると氏は指摘する。同説は、王者ではない孔子（素王）が革命の書『春秋』を作つて素王の法を述べたというものである。これを一步進めた緯書の素王説は、素王の法を漢の法・赤制と見る立場である。このように、「孔丘秘経」説は孔子と『春秋』の關係に擬えて孔子と緯書を結びつけ、『春秋』に素王の法が述べられているのと同様に緯書に漢王朝の法が述べられているとしたもの、と安居氏は考える⁽¹³⁾。

具体的に見てみよう。蘇竟は書簡で、「孔丘秘経」は「漢の赤制を爲（爲漢赤制）」すが、「論者 之を天に本づけ、之を聖に參せずして、猥りに師曠雜事を以て軽く自ら眩惑し、士に説き書を作り、夫の大道を亂すが若きは、焉んぞ信ずべけんや⁽¹⁴⁾」と論し、後半では分野説に基づく天文の知識を展開し、漢に吉兆のあること、諸々の勢力に天助が無いことを指摘する（列伝二〇上蘇竟伝）。「孔丘秘経」は天と聖に関連し、「師曠雜事（李賢によれば雑占の書）」とは異なる書なのだろう。邳惲もまた漢の復興を「孔丘秘経」説と天文分野説から主張している。新末に各地で反亂が起こると、天文曆数に明るい邳惲は分野説に依拠して漢の再受命を確信し、皇位を劉氏に返すよう王莽に上書した。書には、「天地……紀世を顯表し、圖録もて豫め設（李注）……。言ふところは天は豫め圖録の書を設け、帝王の年代を顯明にするなり⁽¹⁵⁾」け、「漢歴 久長にして、孔 赤制を爲（漢歴久長、孔爲赤制）」したとある。王莽は激怒するも

「惲の經讖に據るを以て、即ち之を害するを難は（以惲據經讖、難即害之）」かり、邳惲は「陳ぶる所は皆天文聖意（所陳皆天文聖意）」だと言い張つた（列伝一九邳惲伝）。蘇竟同様に邳惲も孔子の赤制と天文に基づいて漢の復興を訴えている（天文に関しては後述）。

邳惲の書に「孔丘秘經」の語は見えないが、「孔爲赤制」という類似表現が用いられている。赤制の語は緯書にも見える。『春秋演孔図』によれば、孔子が得た黄玉には「孔命を掲げ、應法を作し、赤制を爲す（孔提命、作應法、爲赤制）」との天命が刻まれていた（『水経注』卷二五四水。これを受けてか、『春秋説』は孔子が「漢帝の制法を爲し、圖録を陳叙（爲漢帝制法、陳叙圖録）」したとしている（『春秋公羊伝』隱公元年疏）。『春秋説』の「爲漢帝制法」は蘇竟の「爲漢赤制」と同義だろう。また、『春秋説』の記述は「圖録豫設」「孔爲赤制」という邳惲の上書との関連を想起させる。『春秋公羊伝』哀公一四年の何休注も「夫子素と圖録を案じて庶姓劉季の當に周に代わるべきを知」⁽¹⁶⁾つたとしており、『春秋説』と邳惲の上書との関連を強く示唆する。邳惲の頃に緯書が成立していたかとはともかく、緯書の佚文に確認できる「孔丘秘經」説は既に存在したのだろう。

ただし、赤制＝緯書とは必ずしも言えない。これは公孫述の赤制への言及から読み取れる。更始三年（二五）四月、光武帝に先立って蜀で天子を称した公孫述は後に讖緯書で自身の正統性を主張した（後述）。彼は、「孔子の春秋を作り、赤制を爲して十二公に斷ずるは、漢の平帝に至ること十二代、歴數盡き、一姓再び命を受くるを得ざるを明らかに」⁽¹⁷⁾するものだと考えた（列伝三三公孫述伝）。『春秋』は隱公に始まり一二代後の哀公で終わる。明らかに公孫述は赤制を『春秋』として言及している。とはいえ、赤制と經書の関連は明瞭である。

このように、「孔丘秘経」説は孔子や経書との関連を強調して緯書の佚文に合致する説を展開した。遅くとも新末には漢の復興を正当化するのにこうした儒教的讖緯を利用し得る状況があったのである。では、同説は新末にどれほどの影響力を有したのか。この点に関連して、光武帝が利用した讖緯書はそれ以前の讖緯書を延用したものだと言及されている⁽¹⁸⁾。それらの検討を通じて「孔丘秘経」説の影響力を推察したい。

地皇三年（二二）の光武帝と兄・劉縯の拳兵に先立ち、李通という人物が「劉氏 復た起こり、李氏 輔と爲らん（劉氏復起、李氏爲輔）」という凶讖を光武帝に説いた。光武帝は兄を連想して自分は凶讖に該当しないと考えた（本紀一上光武帝紀上）。また時期は不明だが、光武帝が凶讖を学ぶ蔡少公等と語らい、「劉秀 當に天子と爲るべし（劉秀當爲天子）」との讖を聞いた。周圉は国師公劉秀（劉歆 かと考えたが、光武帝は「何故僕でないかわかるのか」と戯れた（列伝五鄧晨伝）。光武帝に示されたこれらの凶讖はそれぞれ、以下で見ると、地皇二年（二二）の王況の讖・同四年（二三）の西門君恵の讖との何らかの関連が想定される。

卜者の王況は魏成大尹李焉と共謀し、「漢家 當に復興すべし。君の姓は李、李の音は徴、徴は火なり、當に漢の輔と爲るべし」⁽¹⁹⁾と言つて讖書を作成した。そこには、「江中の劉信、……四年に當に軍を發すべし。江湖に盜有り、自ら樊王と稱し、姓は劉氏たり、……。十一年に當に相ひ攻むるべし、太白 光を揚げ、歳星 東井に入れば、其の號 當に行はるべし」⁽²⁰⁾とあった。結局は事が漏れてみな獄死した（『漢書』卷九九下王莽伝下）。ここで王況の讖書に太白や歳星への言及があるのが注目される。西門君恵の讖にも天文への言及が見えるからである。道士であり天文・讖記を好んだ彼は、「星孛 宮室を掃ふ、劉氏 當に復興すべし、國師公の姓名 是なり」⁽²¹⁾という讖を衛將軍王

渉に述べた。王渉は「國師殿中廬に至りて星宿を道語（至國師殿中廬道語星宿）」し、劉歆は「天文人事を言（言天文人事）」って「當に太白星の出づるを待つべし、乃ち可（當待太白星出、乃可）」と助言した。だが、この共謀もまた漏泄のために失敗に終わった（同）。この讖でも、天文を好む西門君恵が彗星の動きに触れ、王渉が星宿に言及し、天文人事を説く劉歆も太白の動きに注意している。

こう見ると、光武帝に先行する讖の多くは劉氏の復興を語る他、天文に基づく予言も行った点で共通している。李通が劉秀に説いた讖は劉歆に仕えて星曆・讖記を好んだ父の李守から継承したものであり（列伝五李通伝）、また「孔丘秘経」説の邳惲・蘇竟も分野説に基づく天文占を行っていた。しかし、王況・西門君恵の讖や李通・蔡少公の讖には孔子や経書との関連が明示されていない点で邳惲・蘇竟とは異なる。『資治通鑑』卷三八漢紀三〇の繫年を信じれば、邳惲の上書は地皇元年（二二〇）のことで、以上の王況・西門君恵・李通・蘇竟の讖に先行する。「孔丘秘経」説は新末には十分な影響力を未だもっていなかったのである。

以上のように、確かに「孔丘秘経」説は光武帝の即位に先立って成立していた。しかし、同時期の劉氏復興に関わる讖の全てに「孔丘秘経」説が反映していたわけではなく、儒教との関係も明らかでなかった。他方で、以上で検討した讖のほぼ全てに分野説を中心とする天文占が併用されていた。このような新末の讖緯事情の中、光武帝はその登極を如何に正当化したのか。章を改めて検討したい。

第二章 光武帝即位時の讖緯

新末、東方の赤眉を代表として各地で反乱が相次いだ。⁽²²⁾ 光武帝も地皇三年に兄と兵を挙げた。即位した更始帝が兄を殺害した後、帝は河北に派遣され、更始二年（二四）に蕭王に封ぜられた。翌三年に河北をほぼ平定した光武帝は諸将から即位を勧められるようになった。本紀一上光武帝紀上によれば、まず幽州の潞東・平谷で賊を壊滅させた後、属将の馬武が即位を勧めたが光武帝は耳を貸さずに冀州の薊へ向かった。薊から中山に至ると再び諸将の上奏を受けたが、帝はやはり即位を認めなかった。常山国南平棘に着くと三たび諸将に即位を請願され、光武帝はなお拒んだが、耿純の進言を受けた。この進言に思うところがあつたのか、帝は即位を検討し始めた。

以上の勸進に緯書を用いた形跡は無い。第一の馬武の勸進は、天下に主がないことを理由に即位を求めるもので、光武帝こそが即位できる、もしくはすべき根拠は示していない。第二の勸進は、「昆陽を征し、王莽 自潰す。後に邯鄲を抜き、北州 弭定す。天下を參分して其の二を有ち、州を跨ぎ土に據り、帶甲は百萬⁽²³⁾」と、光武帝の軍功を主な根拠としている。「天命は以て謙拒すべからず（天命不可以謙拒）」と天命にも触れているが、修辭の域を出ない。第三の耿純の進言は、大衆の離散を防ぐため人心に従つて即位せよ、という点に重点がある。「今功業は即ち定まり、天人亦た應ずるも、大王 留時して衆に逆らい、號位を正さず、純 恐るらくは士大夫は望み絶え計窮すれば、則ち去歸の思有り、久しく自ら苦しむを爲す無からん⁽²⁴⁾」というのである。ここでも天命は言及されているが、強調されているのは民意である。天命を強調するのは第四の勸進である。

常山国鄙に到着すると、光武帝の長安遊学時の旧友・彊華が関中から『赤伏符』なる書を携えてやって来た。そこには「劉秀 兵を發して不道を捕らへ、四夷 雲集して龍 野に鬪ひ、四七の際に火 主と爲らん」(本紀一上光武帝紀上)とあった。これを受けて群臣は、受命の符は応じることが重要であり、天神に依えて民意を満足させよと上奏した。群臣は『赤伏符』を符瑞と捉え、初めて天命を強調して即位を迫ったのである。この光武帝の受命の符瑞を、群臣は「周の白魚、曷ぞ比するに足らん(周之白魚、曷足比焉)」(同)と、周武王の白魚の故事を引き合いに称賛している。李賢は注でこの故事の典拠として『尚書中候』を引用する。これをもって、群臣が光武帝の即位を緯書によって儒教的に正当化したと考えられるかもしれない。しかし、群臣は何故光武帝の受命を武王に比したのか。『赤伏符』に「火爲主」とあるのだから、『尚書中候』に基づくのであれば同じ火徳の堯に比するのが自然かつ効果的だろう。この故事の典拠は本当に『尚書中候』なのか。この問題を解決すべく、先に光武帝の即位時の祝文を確認したい。

六月、光武帝は遂に群臣の勸進に従って皇帝の位に就いた。即位儀礼の祝文では、天地が命を下して百姓を光武帝に帰属させ、群臣がその軍功によって即位せよと上奏し、讖記「劉秀 兵を發して不道を捕らへ、卯金 徳を修めて天子と爲らん」(本紀一上光武帝紀上)の予言があった旨が語られた。まず、『尚書中候』に関する問題を解決したい。金子修一氏によれば、王朝の開祖の即位時(建国時)における天の祭祀(告代祭天)では、三国以降、開祖は天に対して臣称した。唐では天に臣称するのは漢以来だと考えられたが、光武帝は祝文で「秀 敢へて當らず(秀不敢當)」(同)と述べており、「臣秀」とはしておらず、天に対して臣称していない。金子氏は『白虎通』爵が引く

『尚書中候』「天子たる臣放勳（天子臣放勳）」を根拠に、遅くとも『白虎通』が成立した章帝期には天子が天に対して臣事するという觀念が成立していたと考えられる。⁽²⁸⁾後代に継承された天への臣称の根拠が『尚書中候』であり、かつ即位を勸進した群臣が『尚書中候』を踏まえていたのなら、光武帝は即位時に天に対して臣称したはずである。しかし、光武帝は実際には臣称していないのだから、即位時に『尚書中候』の影響があった可能性を高く見積もることはできない。周武王の故事の典拠は今文『尚書』泰誓である。⁽²⁹⁾

祝文中の讖記の検討に移る。この讖記は、光武帝の軍功と、即位できる資格が劉氏に限られていることを簡潔に示すに留まる。一見して、この讖記にも光武帝の即位を儒教的に正当化している箇所は無い。考えられるのは、讖記が彊華の齋した『赤伏符』であり、この『赤伏符』が建武三二年（五六）の封禪で利用された緯書『河図赤伏符』だという可能性である。しかしそうだとすると、この讖記では群臣も光武帝もその儒教性を全く強調していないことが注意される。例えば、光武帝は封禪時の刻石文で緯書名を明示して引用し、河洛経讖に基づいて封禪を挙げたことを表明している（『統漢書』祭祀志上）。これと比較すると、即位時の光武帝や群臣は河洛経讖や孔子に対する関心が著しく低かったことがわかる。仮に讖記が緯書『河図赤伏符』だとしても、光武帝の即位を正当化する讖記が儒教性をもつか否かは彼等の関心事ではなかったように思われる。

以上、諸将の即位要求から光武帝の即位まで、彼等が主張した即位すべき、或いは即位しえる根拠を検討した。彼等が示した根拠には緯書の利用を見ることができない。少なくとも、彼等は緯書や孔子の支持があることを明示していない。では、光武帝の即位は他勢力から如何なるものと認識されたのか。西方の寶融を例に考察しよう。

河西諸郡を統括していた竇融は光武帝の即位を聞いて帰属を考えたが、遠隔の地にあるために果たせず、天水の隗囂に従って正朔を受けていた。建武四年（二八）、隗囂が漢から離反するよう使者をよこすと、竇融は地元の豪傑や太守と相談した。その中で、智者は劉氏以外が立つことは無いと主張した。その根拠は、漢が堯の運を継承して王朝の歴数が長いこと、皇帝の姓号が図書に現れていること、前漢以来漢の再受命が久しく指摘されていること、西門君恵が死に際に「劉秀こそ真の人主」と言い放ったこと、皇帝を自称する者の中で光武帝の洛陽が最も広大で兵も最も強いこと、である。太守間で意見が分かれたが、竇融は漢に帰順した（列伝二三竇融伝）。皇帝の姓号に關して、原文は「今皇帝の姓號 圖書に見る（今皇帝姓號見於圖書）」となっている。李賢は『河図赤伏符』を引いて注としているが、「圖書」という表現自体は孔子や経書との関わりを明示するものではない。加えて、『後漢書』に先立つ東晋袁宏『後漢紀』では「上の姓號、具に天文に見る（上之姓號、具見於天文）」（卷五光武帝紀五）と、姓号は天文に現れたことになっている。前章の検討によれば、新末の讖緯は天文占と併用され、特に邳憚はまず天文占から漢の復興を確信していた。天文に姓号が現れるという表現は決して不自然ではない。また、天地を祭祀して王たらんと考えていた新城蛮中山賊の張滿が建武二年（二六）に捕らえられた際、彼は『後漢書』では「讖文 我を誤てり（讖文誤我）」（列伝一〇祭遵伝）と嘆いたとされているが、先行する東晋常璩『華陽国志』では「天文の誤る所と爲るなり（爲天文所誤也）」（卷五公孫述劉二牧志）となっている。このように、『後漢書』では先行史料中の「天文」が「図書」や「讖文」となっていることがあるため、その内実を考えるには注意を要する。とはいえ、智者が「図書」ではなく「天文」から光武帝の姓号を読み取ったにしろ、「天文」が「天の下した受命の文書」の意で「図書」の言

い換えであるにしろ、智者がそれらと孔子や經書との関係を強調しなかったことには変わりない。⁽³⁰⁾ 光武帝の即位が緯書『河図赤伏符』によるものだとしても、その儒教性は注目されなかったのである。

以上、光武帝即位時の讖緯書を検討した。当時既に「孔丘秘經」説は形成されていたが、光武帝や群臣は讖緯書の利用にあたって孔子や經書との関わりを強調せず、竇融に光武帝への帰順を説いた智者も光武帝の即位の儒教的性格を明言しなかった。光武帝の讖緯書を利用した正統性に儒教的性格を見出すのは即位段階では難しいと言える。一方で、光武帝は晩年の封禪時には緯書『河図赤伏符』等の書名を明らかにして引用しているから、緯書を利用して正統性を確保することは、光武帝の即位後に進められたことになる。ではそれは何時の頃か。この問題を解決すべく、次章ではまず即位後における光武帝の讖緯に対する態度を時系列的に検討したい。

第三章 「建武初」の讖緯書をめぐる光武帝の対応

光武帝の即位一ヶ月後、「讖文を以て平狄將軍孫咸を用ゐて大司馬を行せしめんとするも、衆咸悦ばず⁽³¹⁾」ということがあった。結局、光武帝は群臣の推薦に従って呉漢を大司馬とした（列伝二二景丹伝）。このように、即位直後では光武帝の讖緯書利用に群臣が公然と不快感を示すことができた。仮に、群臣から呉漢の推薦を引き出すための当て馬として孫咸を挙げたのだとすれば、光武帝は讖緯書を否定する前提で利用したことになる。光武帝は未だ讖緯書を絶対視していなかったのである。

また、儒教的讖緯を踏まえた群臣の意見を光武帝が採用しないこともあった。古文学に連なる『費氏易』と『左

『春秋』を学官に立てるか否かが建武四年頃から議論となり、反対派の公羊学者范升と賛成派の左氏学者陳元が中心となって激論を交わした。章帝期の公羊学者李育はこの議論を「多く圖讖を引き、理體に據らず（多引圖讖、不據理體）」と酷評している（列伝六九李育伝）。では、その図讖の内容は如何なるものか。范升・陳元の主張を見ると、どちらも孔子との関係の遠近を問題としている。「五經の本は孔子より始む（五經之本自孔子始）」と考える范升は「左氏は孔子を祖とせずして、丘明より出づ」と『左伝』を批判し（列伝二六范升伝）、対する陳元は「丘明は至賢にして、親ら孔子に受くるも、公羊・穀梁は後世に傳聞す」と弁護した（列伝二六陳元伝）。こうした孔子と学派との関係を示す緯書は、『春秋演孔図』「公羊 孔經を全うす（宋均注に曰く「公羊とは、公羊高なり。經は指して春秋を謂ふ」）や『春秋説題辞』「我が書を傳ふる者は公羊高なり」等が確認できる。当時既に緯書が完成していたかとはともかく、以上のような図讖を公羊学者は利用したのだろう。しかし、以上の論争を経て光武帝は左氏学を学官に立て、博士を選んで李封をその代表とした。これにより諸儒・公卿の議論が紛糾したため、光武帝は李封の病死に託つて左氏学を廃止した（列伝二六陳元伝）。こうした経緯は必ずしも光武帝が儒教的讖緯を踏まえて議論した公羊学者を優遇しなかったことを意味する。建武四年頃の光武帝は未だ即位時同様に讖緯の儒教性に大きな関心は寄せてはいなかったのである。

しかし、建武七年（三二）になると讖緯への態度の相違が臣下の明暗を分かつようになる。建武六年（三〇）に隗囂の勢力から帰順した鄭興は、翌七年に光武帝から郊祀について「吾 讖を以て之を斷せんと欲す、何如（吾欲以讖斷之、何如）」と問われた際、「臣 讖を爲めず（臣不爲讖）」と答えた。これに怒った光武帝が「卿の讖を爲めざる

は、之を非とするか（卿之不爲讖、非之邪）」と問い質すと、鄭興は恐れて「臣 書に於て未だ學ばざる所有り、而して非とする所無きなり（臣於書有所未學、而無所非也）」と弁解した。光武帝は怒りを解いたが、「讖を善くせざるを以ての故に（以不善讖故）」彼を信任しなかつたという（列伝二六鄭興伝）。鄭興に対置されるのは朱浮である。建武七年に太僕に遷つた朱浮は、国学が興つたことを受けて博士を広く求めるよう上書した。上書において、昔は「博士を策試するに、必ず廣く許選を求め、爰に畿夏より、延ひて四方に及ぼ³⁶」したが、光武帝は詔書を発して「更めて五人を試みるも、唯だ洛陽城に見在する者を取るのみ³⁷」だと朱浮は指摘する。朱浮は上書末尾で「幸ひにも圖讖を講ずるに與るを得れば、故に敢て越職（幸得與講圖讖、故敢越職）」したと申し開きをしているが、光武帝は「之を然りと（然之）」した（列伝二三朱浮伝）。後に朱浮は大司空にまで上り詰めている。この朱浮の上書で注目すべきは朱浮が挙げた越職の理由である。彼の官職である太僕は天子の車馬を管轄するもので、太学や博士とは関係無い。この越職を正当化するのが「幸得與講圖讖」である。これに博士に関する上書の越職行為の正当化を期待できたことは、その図讖が儒教と結びつき、太学の博士とも関わるものだったことを思わせる。さらに、「幸得與」という表現は、朱浮の「講圖讖」が光武帝の命を受けたもの或いは認可を得たものだった可能性を示唆する。この段階になると光武帝の意向を受けて儒教的讖緯を扱う者が現れたのではないか。

このように、建武四年頃までは讖緯を根拠とした人事に群臣が不快感を示すことを許容し、また儒教的讖緯を利用した公羊学者の意見を退けて左氏学を学官に立てた光武帝が、建武七年では郊祀のことを尋ねて讖を学んでいないと答えた鄭興に怒り、図讖への関与を理由に職分に無い博士に関する上書を行った朱浮の意見に耳を傾けるよう

になっていた。以上から、讖緯そのもの、また讖緯と儒教との関わりに対する光武帝の認識や姿勢には、建武四年から七年の間に変化が生じたと思定される。

ここで、光武帝による図讖の校定について考えたい。というのも、「はじめに」で紹介した黄氏の議論ではこの図讖校定を経て讖記『赤伏符』は緯書『河図赤伏符』となったとされているからである。史料上、二人の人物が図讖校定の命を受けたことを確認できる。一人は尹敏である。光武帝は「敏の博く經記に通ずるを以て、圖讖を校せしめ（敏博通經記、令校圖讖）」たが、尹敏は帝に「讖書は聖人の作る所に非ず（讖書非聖人所作）」と諫め、聞き入れられないと見るや、わざと讖文を偽造して帝に讖書の疑わしさを訴えた。罪には問われなかったが出世は滞ったという（列伝六九上尹敏伝）。校定対象となった図讖の特徴は尹敏が偽造した讖文「君に口無し、漢輔と爲らん（君無口、爲漢輔）」から推測できる。「君」から「口」を無くすと「尹」になる。尹姓の者が漢を輔弼するという予言である。尹敏が校定を命じられた図讖にはこのような予言が含まれていたのだろう。その中に光武帝が祝文で読み上げた讖記「劉秀發兵捕不道、卯金（非劉）修德爲天子」があったことは想像に難くない。このように、即位段階では儒教的性格が明確でなかった讖記を、光武帝は経学に優れた人物に命じて整理させようとしたのである。

この図讖校定は何時頃のことか。校定を命じられた今一人の人物は薛漢である。父とともに韓詩の章句で有名になり、当時第一の詩学者とされ、「尤も善く災異讖緯を説（尤善説災異讖緯）」いた彼は、「建武の初め、博士と爲り、詔を受けて圖讖を校定」した（列伝六九下薛漢伝）³⁸。『後漢書』の「建武初」は何時頃までを含む語なのか。例えば、「建武初」（列伝二九劉平伝）の龐萌の反乱は本紀一上光武帝紀上では建武五年に記録されている。また、「建武初」（列

伝二六陳元伝)に学者の尊敬を集めた杜林・鄭興が光武帝に帰順したのは建武六年である(列伝一七杜林伝・列伝二六鄭興伝)。すると、薛漢が図讖校定を命じられた「建武初」は建武六年前後までを可能性として考えなければならぬ。

薛漢と尹敏はその学問系統を異にしている。薛漢の得意とする韓詩は今文学だが、尹敏は今文学の『歐陽尚書』を修めた後に古文学も学び、『毛詩』『穀梁』『左伝』を修めた(列伝六九下尹敏伝)。薛漢は讖緯を得意とする一方、尹敏は讖緯を否定した。前述の鄭興も有名な左氏学者である。章帝期の左氏学者賈逵は、「光武皇帝に至り、獨見の明を奮ひ、左氏・穀梁を興し立つるも、會たま二家の先師は圖讖に曉らかならず、故に中道にして廢せしむ³⁹⁾」と回顧している(列伝二六賈逵伝)。ならば、左氏学の復興を認めた頃の光武帝は、左氏学者が讖緯に反対する傾向にあることを未だ多くは体験していなかったことになる。すると、光武帝と尹敏とのやり取りが、讖緯を用いた公羊学者の意見を退けて左氏学を学官に立てた建武四年の前に行われた可能性を高く見積もることはできない⁴⁰⁾。また、建武七年に「臣不爲讖」と答えただけの鄭興に怒りをあらわにした光武帝が、同時期に「讖書非聖人所作」とまで言った尹敏の批判を「納れず(不納)」（列伝六九下尹敏伝）という反応で済ませるはずがない。従つて、薛漢・尹敏の参加した図讖校定は建武四〜七年に、より絞れば建武五・六年に開始された可能性が高い。

このように、建武四〜七年は光武帝の讖緯に対する認識・姿勢が変化した時期であり、また光武帝による図讖校定が始まったと思われる時期である。では、こうした動きが何故建武四〜七年に起こったのか。またこれを検討するには、それ以前の時期に何故光武帝が儒教的讖緯に関心を寄せなかったのかを考える必要もある。次章ではまず

後者を、次いで前者を考察する。

第四章 建武五・六年の政治情勢下における儒教的讖緯

光武帝が挙兵や即位の際に孔子や経書との関係を明確にすることなく讖緯書を用いたことは第二章で見た。何故帝は儒教の権威を借りることなく讖緯書の真实性を人々に訴えることに一定程度成功したのか。⁽⁴¹⁾考えられるのは、当時の光武帝にとって儒教的讖緯はそもそも大きな効果をもつ讖緯ではなかったという可能性である。李通が光武帝に凶讖「劉氏復起、李氏爲輔」を示して挙兵を勧めた頃、兄・劉續は諸豪傑を招集して挙兵を呼びかけ、親客を派遣して新野の鄧晨や宛の光武帝に決起するよう促し、自身も郷里・春陵の子弟を率い賓客に役目を割り当て、新野・宛と合わせて七〇〇〇〇八〇〇〇人の兵を挙げた（列伝四齊武王續伝）。光武帝や鄧晨が率いたのも賓客であった（本紀一上光武帝紀上・列伝五鄧晨伝）。春陵の子弟とは郷里で劉兄弟が教導していた目下の者達、賓客とは劉氏や鄧氏の私有地を耕作したり彼等に保護・利用されたりした者達であろう。加えて、「世よ貨殖を以て著姓（世以貨殖著姓）」で「居家富逸にして、閭里の雄たり（居家富逸、爲閭里雄）」という南陽宛県の李通は、地元周辺に大きな影響力をもっていたはずである。つまり、凶讖「劉氏復起、李氏爲輔」はそうした南陽の郷里社会・豪族社会の具体的な関係性に働きかけ得るものであり、⁽⁴²⁾それで南陽の子弟・賓客の心を掴めさえすれば経書や孔子はことさらに強調される必要は無かったのである。

河北平定の軍功を内容の一半にもつ祝文中の讖記「劉秀發兵捕不道、卯金修徳爲天子」も同様に理解できるので

はないか。光武帝に即位を勧めて即位儀礼を目的にしたりしたのは、河北討伐に従軍した者達であり、また討伐の結果として光武帝に投降した者達である。中には儒教の教養をもつ者もいたが、当時の光武帝集団が共有する最も重要な具体的関係性としては、やはり河北討伐を置いて他に無い。それは、群臣の数度にわたる勦進が天命以上に光武帝の軍功を強調し、光武帝の下に集まった士大夫の離散を危惧していたことから看取できる。こうした集団を擁する光武帝が即位するためには、その共有記憶ともいべき軍功を強調した讖緯のほうが、儒教的讖緯よりも効果的だったと思われる。このように、具体的な関係性を有する集団にとって儒教的讖緯は抽象的に過ぎるのであり、最も効果的な讖緯とはならなかったのである。

ただし、以上の推察が正しいとしても、そのことは郷里での生活や河北平定という記憶を強くは共有できない新参の人士に対し、儒教的讖緯を併用して働きかけることを妨げない。そう考えると、当時の光武帝には儒教的讖緯を用いることができない、もしくはその使用を極力避けたい理由が一方で存した可能性が残る。

まず、儒教的讖緯を使用できなかった理由として考えられるのは、光武帝がその存在を知らなかった可能性である。光武帝は莽新时期に長安で『尚書』を教授されている(本紀一上光武帝紀上)。仮に緯書が既に完成していたとしても、漢の受命を説く讖緯が当時の長安で教授されるはずがない。王莽は符命と儒教を関連付けるに至らなかったという板野・保科両氏の見解を踏まえれば、王莽の符命も経書と関連付けて教授されることはなかったであろう。そこから敷衍して、そうした経学を学んだ光武帝にとって、孔子や経書と関わるものとして劉氏復興を予言する讖緯を受容するには一定の時間を要したのではないか、ということも想定可能である。

次に、儒教的讖緯の使用を避ける理由として光武帝の施政方針との齟齬を考慮することができる。光武帝は次代明帝とともに法吏を用いて権柄を独占する支配にも力を注いだ。⁽⁴³⁾ 建武年間に孝廉に挙げられた第五倫は、「光武 王莽の餘を承け、頗る嚴猛を以て政を爲」したと評価している(列伝三二第五倫伝)。これを列伝二三朱浮伝の記載から具体的に確認しよう。地方長官の黜陟について、旧制では州牧が不適任者を上奏すると三公が掾史を派遣して取り調べ、その後には彼等の解任を決定した。しかし、光武帝は建武七年以前に「時に明察を用ゐ、復た三府に委任せずして、權もて刺擧の吏に歸」した。⁽⁴⁵⁾ 「三府」は三公の府、「刺擧之吏」は州牧である。これに対して朱浮は、「陛下 往者に上の威の行はれず、下の國命を専らにするを疾み、即位以來、舊典を用ゐず、刺擧の官を信じ、鼎輔の任を黜」している⁽⁴⁶⁾と上疏した。彼の理解では、光武帝は皇權を振興すべく州牧の監察權を強化したのである。朱浮が建武七年に「幸得與講圖讖」を理由に博士を広く採用するよう求めたことは前章で見た。そうした朱浮が行った右の上疏に、光武帝の政治志向と儒教的讖緯の政治思想が必ずしも合致していないという可能性を見るのは牽強ではあるまい。実際、光武帝が封禪を奉行した際にその根拠として引用した『河図會昌符』には、「誠に帝道を孔矩に合せば、則ち天文の靈 出で、地祇の瑞 興らん」⁽⁴⁷⁾ (『統漢書』祭祀志上)と、皇帝の政治のあり方を孔子の道に合致させれば天地は符瑞を齎すとある。これは皇權を儒教の枠内に収めることを要求するものであり、光武帝の「明察」な支配志向との間に多少とも矛盾を生むものであろう。光武帝は自身の政治運営を阻害しかねないものとして儒教的讖緯を警戒し、その使用を避けて建武四年に凶讖を多く引いた公羊学者の議論を支持しなかったという事態は十分考えられる。

しかし、建国前後に儒教的讖緯の利用が見られなかった理由が以上の推察通りだとしても、光武帝は建武四〜七年頃から儒教的讖緯に関心を強めたのだから、その時期に上述の理由が解消した、もしくは儒教的讖緯の必要がなくなった理由を超越したことになる。列伝一九申屠剛伝に建武七年以降のこととして、「時に内外の羣官、多く帝（光武帝）自ら選舉し、加ふるに法理は嚴察、職事は過だ苦しきを以てす⁽⁴⁸⁾」とあり、光武帝の政治姿勢は当該時期の後も大きな変化はなかった。⁽⁴⁹⁾従って、光武帝が儒教的讖緯に注目し始めた原因としてはその需要の高まりを重視すべきだろう。では、建武四〜七年頃の如何なる事態が儒教的讖緯の必要性を増したのか。

光武帝の即位当時、長安では更始帝が生き長らえ、赤眉が劉盆子を天子としており、帝の即位に前後して蜀の公孫述が称帝し、梁王劉永が天子を自称した。その他、隴右の隗囂や真定王劉楊等の勢力も存していた。中には讖緯書を利用する者もいた。最も早く確認できる例は劉楊による建武元年（二五）の讖記である（列伝一一耿純伝）。しかし、この讖記に儒教的性格を読み取ることはできず、かつ翌二年に劉楊は誅殺されている。劉楊の讖記が建武四年以降に讖緯と儒教の関係に対する光武帝の姿勢を変化させた原因だとは考え難い。

光武帝に最も圧力をかけた讖緯書利用者は公孫述である。建武六年頃、公孫述は王莽を土徳黄色、自身を金徳白色と考え、讖記を利用して五徳の運行が自身にあることを示し、中原に書を送って衆心を動かさんとした。このような公孫述の運動を光武帝は憂慮し、公孫述に書を与えて彼の讖記解釈は誤っていると論じた（列伝三公孫述伝）。公孫述の引用した讖記は『録運法』『括地象』『援神契』である（後述）。では、光武帝はこれに如何に対処したのか。建武六年二月、光武帝の敵対勢力はほぼ公孫述と隗囂を残すのみとなった。光武帝は派兵を続けつつも本格的

な征討を一時控える方針を取った。この時、「賊檄 日に百を以て數へ、憂 勝ふべからず（賊檄日以百數、憂不可勝）」という中にあった光武帝は、「餘間を以て經藝を講じ、圖讖を發く。公孫述に制告し、署して曰く「公孫皇帝」と」⁽⁵⁰⁾という対応を取った（『太平御覽』卷九〇皇王部一五後漢世祖光武皇帝所載『東觀漢記』）。大量の檄文を送りつけた賊とは公孫述と隗囂以外にあり得ない。「講經藝、發圖讖」は、続けて公孫述に書簡を送ったと記されていること、上述の公孫述伝によればその書簡は讖記に関わるものだったことを踏まえると、公孫述の檄文に対抗するための行動だと考えてよいだろう。

第一章で述べたように、公孫述は孔子の赤制に言及している。彼の利用した讖記は儒教性を有していた可能性が高い。事実、公孫述の利用した讖記は、『録運法』の「昌帝を廢し、公孫を立つ（廢昌帝、立公孫）」、『括地象』の「帝軒轅 受命し、公孫氏 握る（帝軒轅受命、公孫氏握）」、『援神契』の「西太守、卯金を乙す（西太守、乙卯金）」と（列伝三公孫述伝）、『河図録運法』『河図括地象』『孝經援神契』として知られる緯書八一篇である。しかし、『華陽国志』卷五公孫述劉二牧志には、

述 乃ち檄を中國に移し、圖緯を稱引して以て衆を惑はず。世祖 報じて曰く「西狩獲麟讖に曰く『乙子卯金』と、即ち乙未歳に劉氏に授く、西方の守に非ざるなり。『光 昌帝を廢し、子公孫を立つ』と、即ち霍光 昌邑王を廢し、孝宣帝を立つるなり。黃帝の姓は公孫、自ら土徳を以て君たるは、君の知る所なり。『漢家九百二十歳、蒙孫を以て亡ぶ、受くるに丞相を以てし、其の名は當塗高なり』と、高は豈に君の身ならんや。……」⁽⁵¹⁾とあり、光武帝は報書の中で専ら『西狩獲麟讖』なる讖緯書を引用している。その内容は『後漢書』公孫述伝に見

える『録運法』『援神契』にはほぼ一致し、『括地象』と共通する部分をもつ。かつ、「以蒙孫亡」は漢魏革命時に利用された緯書『春秋佐助期』『漢以蒙孫亡』に一致し、『三国志』卷二文帝紀注引『献帝記』、「其名當塗高」に似た「代漢者當塗高」という讖文は「春秋讖」にあったとされる（同書卷四二周群伝）。『西狩獲麟讖』は他書に見えない讖緯書であり、『西狩獲麟讖』一書の内容が複数の緯書に分散して見られることを考えると、『西狩獲麟讖』が解体され、後に（恐らく凶讖校定時に）その内容が整理されて『河図録運法』等の一部になったと思われる。『後漢書』の『録運法』等が地の文に記され、『華陽国志』の『西狩獲麟讖』が光武帝の報書中に見られることも、その可能性を高めている。公孫述が実際に引用したのも『西狩獲麟讖』であろう。この讖緯書は経書との関わりは間接的だが孔子との関連は明白である。

上述の『東觀漢記』『後漢書』『華陽国志』によれば、公孫述が檄文を中原に送って讖緯で衆を惑わしたことで光武帝は憂慮に耐えなかった。こうした事態が建武六年頃のことだというのは示唆的である。この年は光武帝が隗囂・公孫述を除くほぼ全ての敵対勢力を平定した年だが、平定即安定とはならない。建武二年には、かつて光武帝の河北討伐に協力した幽州の漁陽太守彭寵が早くも反乱を起して翌年に燕王を自称し、五年になってようやく平定された。この建武五年の三月には、前述の龐萌が反乱を起こして徐州東海郡を根拠地とする海西王董憲の勢力に合流して光武帝と対立し、翌六年二月に平定されている（以上、本紀一上光武帝紀上）。建武六年までに四川地域のみを保有する公孫述に対して圧倒的優勢に立った光武帝が、それでも述の扇動に頭を痛めたのは、自身の領有する中原地域にその扇動に呼应しかねない反乱勢力が潜在する可能性を自覚していたからであろう。事実、公孫述の扇動による

ものかは不明だが、建武八年（三三）に潁川郡の盜賊が属県を陥落させ、河東郡の守兵が反乱を起こし（本紀二下光武帝紀下）、また東郡・濟陰郡でも盜賊が発生している（列伝一一耿純伝）。潁川の盜賊征討のために、自ら隗囂討伐に向かっていた光武帝は中原に引き返さなければならなかった。

興味深いのは、董憲や齊王張歩や劉紆（董憲や張歩を王に封じた劉永の子）の征討の最中であつた建武五年に、光武帝の儒教に関わる活動が集中していることである。光武帝は二月に孔子の子孫である孔安を殷の後として殷紹嘉公に封じ⁽⁵²⁾、八月に徐州方面に巡幸して大司馬呉漢に董憲等の討伐を命じる一方、一度帰還した後の一〇月に魯に赴いて大司空に孔子を祀らせ、青州方面に巡幸して張歩に迫つてこれを降し、洛陽に帰るや落成まもない太学に向いて博士弟子に賜り物をしている（本紀一上光武帝紀上）。また、三月には江陵県津郷で漢軍と賊の戦闘が行われたが（同）、光武帝は、同年に孝廉に挙げられるも江陵に逃げて教授を続けていた易学者・劉昆を江陵令に除している（列伝六九上劉昆伝）。儒臣にして大司徒の伏湛が上奏した郷飲酒礼を施行したのもこの年である（列伝二六伏湛伝）。こうした活動は光武帝の内政整備の一環であろうが、それが敵対勢力の征討と並行して行われている点で、儒教の保護・発揚を打ち出すことで人心を収攬し社会を安定させる意図もあつたように思われる。この時に光武帝は儒教的讖緯にも注目し始めていたのではないか。もちろん、翌建武六年から始まる公孫述の儒教的讖緯を用いた扇動工作によつてその有効性に漸く気づいたという可能性を否定することはできないが、上述の諸活動を踏まえれば、五年の段階で光武帝は儒教的讖緯の有効性を感じ取れる意識を儒教に対してもつていたはずである。挙兵・即位時の集団と同程度には具体的な関係性を取り結ぶことが困難な各地域の反乱勢力・不穏分子に対処する一つの手段として、抽象

的ながらもそれ故に広く共有されていた権威、つまり儒教に訴えかけることが効果的だと光武帝には感じられたの
だろう。光武帝との間に圧倒的に不利な勢力差をつけられていた公孫述が、儒教的讖緯で遠く離れた中原を扇動し
たのも同様の発想によるものだと思われる。これは当時既に儒教が社会に広く深く浸透していたことを前提とする。
しかし、この前提が儒教的讖緯の利用に直結するわけではなかった。儒教的讖緯が光武帝に利用されるに至るには、
本章で見たような政治的緊張に帝が直面することが必要だったのである。

おわりに

「孔丘秘経」説は新末には成立していたが、そうした儒教的讖緯は未だ影響力をもつて広まっておらず、光武帝も
拳兵から即位後しばらくは讖緯と儒教との関連に大きな関心を寄せなかった。当時の光武帝にとってより効果的な
讖緯とは、郷里社会や河北討伐で築いた具体的な関係性に働きかける讖緯であり、一方で儒教性をもつ讖緯は光武
帝に馴染みが薄く、その政治思想は帝の施政方針と齟齬をきたしかねないものだったと考えられる。しかし、建武
六年頃から公孫述が儒教的讖緯で中原を扇動せんと工作を始めた。光武帝も建武五年に儒教を介して戦乱による社
会の緊張・混乱を安定させようと様々な活動を行っている。光武帝による凶讖校定の開始もこの頃であろう。彼等
のこうした活動は、光武帝政権に必ずしも心服していない中原の人々に対し、抽象的ながらもそれ故に広く共有さ
れていた権威、つまり儒教に訴えかけることで、或いは扇動し、或いはその人心を収攬するためのものだった。こ
れは儒教の社会への浸透を前提とするが、この前提が光武帝による儒教的讖緯の利用につながるには、後漢初年の

政治的緊張を契機とする必要があった。

「はじめに」や第二章で触れたように、王莽の符命は光武帝の凶讖としばしば比較され、儒教性の希薄さが指摘されている。しかし、即位段階では光武帝も凶讖の儒教性を強調しておらず、王莽の符命と大差無い。ここに、両漢期に人臣から皇帝となるには経学や孔子の裏付けでなく何より天命が重要だと考えられていたことが窺える。莽新末後漢初の儒教的讖緯は皇帝と天命の関係に対して一步遅れた位置にいたのである。

このことは光武帝初年に至っても儒教的讖緯が自明の権威を有していなかったことを示唆する。これは光武帝が中興・継承した漢王朝、つまり前漢において、今文家の経説やそこから派生した災異説・分野説等とはかく、少なくとも劉氏の受命を直接に予言する讖を経学や孔子と結びつける国家事業が存在しなかったことを意味するのではないか。そのような予言が既に緯書に結実して国家的権威をもっていたのなら、光武帝は建武三年に長安を奪還して旧朝の蔵書を利用できるようになった後では、漢の権威としての緯書を積極的に利用したにちがいないからである。この想定は、讖と緯が結合したものである。漢の権威としての緯書を積極的に利用したにちがいないから進めていたかの可能性を考えさせる。また、建武五・六年頃から光武帝が関心を示し始めたそのような緯書はその後の後漢においてどのような地位を得て如何なるものとして存在したのか。これらの検討は今後の課題とする。

註

(1) 「皇帝支配の成立」同『中国古代国家と東アジア世界』

第一篇第二章、東京大学出版会、一九八三年。同『秦漢帝国』講談社、一九九七年。なお、儒教国教化議論の研究史

整理は、福井重雅『漢代儒教の史的研究——儒教の官学化をめぐる定説の再検討——』緒言（汲古書院、二〇〇五年）参照。

(2) 「図讖と儒教の成立」「儒教の成立」同『儒教成立史の研究』第九・一二章、岩波書店、一九九五年。

(3) 保科季子「受命の書——漢受命伝説の形成——」『史林』八八—五、二〇〇五年。

(4) 「漢室復興的政治文化意義——讖緯和『公羊』学対東漢政治的影響」同『春秋』与『漢道』——両漢政治与政治文化研究』第五章、中華書局、二〇一一年。

(5) 前掲註(2) 板野氏論文参照。

(6) 前掲註(3) 保科氏論文参照。

(7) 「東漢図讖『赤伏符』本事考」同『東漢讖緯学新探』貳、台湾学生書局、二〇〇〇年。

(8) ただし、本稿は黄氏に全面的に賛同するものではない。校定後の緯書も「讖記」や「讖文」として、或いは篇名のみで史料に見える例がある。明帝期に東平王蒼は宗廟音楽に関する上書の中で、「元命包曰……」「叶圖徵曰……」と緯書『春秋元命包』『葉叶圖徵』を篇名のみで引用している（『統漢書』祭祀志下所引『東觀漢記』）。また、章帝が四分曆の制作を命じる詔勅で「春秋保乾圖曰『三百年斗曆改憲』」

としたものが、それを受けた賈逵の曆論では「讖文曰『三百年斗曆改憲』」とされている（同書律曆志中）。従って、「讖記」「讖文」や篇名のみを表記は、緯書を引用した当人または史書編纂者の表現の問題であり、必ずしも当時の緯書名の実情を反映したものではないと考えられる。

(9) 讖緯思想については、陳槃『古讖緯研討及其書録解題』（上海古籍出版社、二〇一〇年）、安居香山・中村璋八『緯書の基礎的研究』（国書刊行会、一九七六年）、安居香山『緯書の成立とその展開』（国書刊行会、一九七九年）、鍾肇鵬『讖緯論略』（遼寧教育出版社、一九九一年）、徐興無『讖緯文献与漢代文化構建』（中華書局、二〇〇三年）等参照。緯書八一篇については、安居「緯書八十一篇説考」（同『緯書の成立とその展開』前篇第二章）参照。

(10) 前掲註(2) 板野氏著書第九章参照。

(11) 紀年は『資治通鑑』卷四一漢紀三三による。

(12) 「秘經、幽秘之經、即緯書也。」「言緯書玄祕、臧於幽室、文雖微隱、事甚明驗。」（ともに列伝二〇上蘇竟伝）

(13) 安居香山「孔丘秘經」考（前掲註(9) 安居・中村両氏著書第一編第四章）参照。

(14) 論者若不本之於天、參之於聖、猥以師曠雜事輕自眩惑、説士作書、亂夫大道、焉可信哉。

(15) 天地……顯表紀世、圖錄豫設〔李注〕……。言天豫設圖錄之書、顯明帝王之年代也。

(16) 夫子素案圖錄知庶姓劉季當代周。

(17) 孔子作春秋、爲赤制而斷十二公、明漢至平帝十二代、歷數盡也、一姓不得再受命。

(18) 安居香山「圖讖の形成とその延用——光武革命前後を中心として——」(前掲註(9))安居・中村兩氏著書第一篇第二章)参照。

(19) 漢家當復興。君姓李、李音徵、徵火也、當爲漢輔。

(20) 江中劉信、……四年當發軍。江湖有盜、自稱樊王、姓爲劉氏、……。十一年當相攻、太白揚光、歲星入東井、其號當行。

(21) 星孛掃宮室、劉氏當復興、國師公姓名是也。

(22) 新末の混乱から劉秀の天下平定までの情勢は、木村正雄「前後漢交替期の農民反乱——その展開過程——」「兩漢交替期の豪族反乱——隗囂集団と公孫述集団——」「劉永集団の形成と展開」(同『中国古代農民叛乱の研究』第二篇第二章、東京大学出版会、一九七九年)、狩野直禎「後漢王朝の成立」(『光武帝期』(同『後漢政治史の研究』第一・第二章、同朋舎出版、一九九三年)、小嶋茂稔「後漢建国に至る政治過程の特質と郡県制」(同『漢代国家統治の構造と展

開——後漢国家論研究序説——』第一部第一章、汲古書院、二〇〇九年)参照。

(23) 征昆陽、王莽自潰。後拔邯鄲、北州弭定。參分天下而有其二、跨州據土、帶甲百萬。

(24) 今功業即定、天人亦應、而大王留時逆衆、不正號位、純恐士大夫望絕計窮、則有去歸之思、無爲久自苦也。

(25) 劉秀發兵捕不道、四夷雲集龍鬪野、四七之際火爲主。

(26) 劉秀發兵捕不道、卯金修德爲天子。

(27) 「漢代における郊祀・宗廟制度の形成とその運用」(同『中国古代皇帝祭祀の研究』第II部第四章、岩波書店、二〇〇六年)。

(28) 地皇四年に敗北を悟った王莽は、群臣を率いて南郊に赴き、符命の本末を天に述べた。その中で王莽は天に対して臣称している(『漢書』卷九九王莽伝下)。これは告代祭天ではないため光武帝の祝文と一概に比較できないが、少なくとも王莽の臣称が光武帝に影響を与えなかったのは確かである。

(29) 『漢書』卷五六董仲舒伝・卷七七劉輔伝の董仲舒の対策や劉輔の上疏、また列伝一〇王霸伝・列伝七〇上杜篤伝の王霸の發言や杜篤「論都賦」に見える周武王の白魚の故事の典拠は、各当該箇所につされた顔師古や李賢の注に従え

ば、今文『尚書』秦誓である。「秦誓」と『尚書中候』の同故事の差異は後者の白魚が文字を伴っている点である（前掲註（3）保科氏論文参照）。しかし、当該勸進中の「周之白魚、曷足比焉」という表現に、秦誓篇を退けて『尚書中候』を典拠と考える必然性は無い。その上、勸進直前の路東・平谷での賊討伐に参加した諸將軍を列挙する列伝九耿弇伝には、上記四例の一つである王覇も含まれている。王覇も一連の勸進に加わって勸進に武王の故事を提供したのだろう。このように、群臣の勸進は確かに儒教經典による文飾が認められるが、それは前漢以来の常套表現で光武帝の受命を讃える以上のもではない。

(30) 仮に、智者の指摘した「図書」が天文書の類だとすれば、智者は光武帝の正統性を語る上で「図書」の儒教的性格ではなく天文書としての性質に注目したことになる。光武帝は即位直後、「王梁主衛作玄武」とある『赤伏符』に基いて野王令王梁を大司空に抜擢した（列伝二二王梁伝）。前掲註（7）黄氏論文に従えば、『赤伏符』の文言は本来「王良（＝王梁）」という星は衛の分野にあって北方玄武の象徴である」という意味であり、『赤伏符』は確かに天文書的性格を有したことになる。

(31) 以讖文用平狄將軍孫咸行大司馬、衆咸不悅。

(32) 左氏不祖孔子、而出於丘明。

(33) 丘明至賢、親受孔子、而公羊・穀梁傳聞於後世。

(34) 公羊全孔經（宋均注曰「公羊、公羊高也。經指謂春秋」）。〔初学記〕卷二（文部）

(35) 傳我書者公羊高也。（春秋公羊伝）何休序徐彦疏

(36) 策試博士、必廣求詳選、爰自畿夏、延及四方。

(37) 更試五人、唯取見在洛陽城者。

(38) 建武初、爲博士、受詔校定圖讖。

(39) 至光武皇帝、奮獨見之明、興立左氏・穀梁、會二家先師不曉圖讖、故令中道而廢。

(40) 光武帝期の左氏学者・桓譚は、大司空宋弘の推薦で議郎を拝した後、上疏中で讖記を批判するも、帝の不興を買うに留まっていた（列伝二八上桓譚伝）。宋弘が大司空だったのは、「建武二年二月から六年二月までであったから、彼（桓譚——筆者注）の議郎に挙げられたのは、ただ漠然と、この頃とせねばならぬ」（前掲註（22）狩野氏著書第二章、一四九頁）ため、上疏が行われたのもその頃である。本論の検討と合わせれば、やはり建武四〜七年頃と思われる。

(41) 呂宗力「讖言和讖謠」〔同〕『漢代的讖言』第四章、浙江大學出版社、二〇一一年）は、讖言は流行するほど信仰を

集め、その予言的中する可能性を高めると考え、伝播の過程で人々の好悪の篩に掛けられ、淘汰されずに流通を速めた讖言が政治に影響を与えたとする。

(42) 以上の推論は、宇都宮清吉「劉秀と南陽」(同『漢代社会経済史研究』補訂版第一〇章、弘文堂、一九六七年)及び氏の凶讖「劉氏復起、李氏爲輔」に対する訳出「劉氏復興のときには、李氏こそパトロン」(三九二頁)に啓発を受けた。

(43) 世祖既以吏事自嬰、明帝尤任文法、總攬威柄、權不借下。〔芸文類聚〕卷二帝王部二漢明帝所載華嶠『後漢書』

(44) 光武承王莽之餘、頗以嚴猛爲政。

(45) 時用明察、不復委任三府、而權歸刺舉之吏。

(46) 陛下疾往者上威不行、下專國命、即位以來、不用舊典、信刺舉之官、黜鼎輔之任。

(47) 誠合帝道孔矩、則天文靈出、地祇瑞興。

(48) 時内外羣官、多帝自選舉、加以法理嚴察、職事過苦。

(49) 閻步克「儒生与文吏的融合——士大夫政治的定型——」

(同『士大夫政治演生史稿』第一〇章、北京大学出版社、一九九六年)は、後漢における王朝の「吏化」傾向を論じている。

(50) 以餘閒講經藝、發圖讖。制告公孫述、署曰「公孫皇帝」。

(51) 述乃移檄中國、稱引圖讖以惑衆。世祖報曰「西狩獲麟讖曰『乙子卯金』、即乙未歲授劉氏、非西方之守也。『光廢昌帝、立子公孫』、即霍光廢昌邑王、立孝宣帝也。黃帝姓公孫、自以土德君、君所知也。『漢家九百二十歲、以蒙孫亡、受以丞相、其名當塗高』、高豈君身耶。……」。

(52) 本紀一上光武帝紀上の建武五年二月壬申条に「封殷後孔安爲殷紹嘉公〔李注〕成帝封孔吉爲殷紹嘉公、安即吉之裔也」とあり、『漢書』卷一八外戚恩沢侯表の殷紹嘉侯孔何齊の侯状戸数欄に「以殷後孔子世吉適子侯」とある。

(東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程)

should occupy an important place in the history of the growth of Confucianism because of its primary role in the establishment a “new” Han Taixue grounded in the study of the Confucian classics.

Emperor Guangwu and Mystic Confucian Doctrine as Seen from
the Political Situation of the Late Xin–Early Later Han Dynasty Eras

MIURA Yuki

Along with development of the study of the Confucian classics (*jingxue* 經學) during the Han Period, there also appeared a related strain of mystic doctrine (*chenwei* 讖緯), related to the power of the emperors. The research to date on the use of *chenwei*-related works has indicated the possibility that although the writings on divination (*tuchen* 圖讖) done at the time of the enthronement of Later Han Emperor Guangwu (Guangwudi 光武帝; r. 25–57 CE) had no ideational connection to either Confucius or the Confucian classics, by the time of the *fengshan* 封禪 festivals of heaven and earth at Mt. Taishan 泰山, such prophetic writing was being influenced by Confucian ideas. The present article follows this research in considering exactly how Emperor Guangwu came to deal with *chenwei* works in connection with Confucian thought.

To begin with, despite the fact that the theory that Confucius had written *chenwei* books to testify to the establishment and continued existence of the Han dynasty (Kong Qiu Mijing 孔丘秘經 Theory) had already appeared during the last years of the Xin Dynasty, the influence of Confucian *chenwei* thought was no widespread; and even after the uprising and enthronement of Emperor Guangwu, little interest was directed at the connection of *chenwei* to Confucianism. Rather, it was a time when the Emperor regarded *chenwei* as being effective in more concrete matters connected to rural life, the conquest of Hebei, etc.

It was not until around the 6th year of Jianwu Era (30 CE) that Gongsun Shu 公孫述, the independent warlord of the Sichuan region, began operations to incite people by spreading the word of Confucian *chenwei* throughout Zhongyuan 中原. Meanwhile, beginning in the previous year, Emperor

Guangwu had initiated various programs aimed at stabilizing the social crisis and chaos in the midst of military conflict through the introduction of Confucian ideas. Both movements were attempts to appeal to, agitate among and win the hearts of the people of Zhongyuan, who were by no means steadfast in loyalty to the Emperor Guangwu's regime, by appealing to them, even if symbolically, with the then widely shared authority, i.e. Confucian ideas.

The author concludes that the preconditions for these efforts, i.e. the penetration of Confucianism into Chinese society, led to the utilization of Confucian *chenwei* by Emperor Guangwu, through the political tensions at the beginning of the Later Han Period.

The Military Command Authority of the Tang Emperors in Relation to the Jinwuwei Regiment of Imperial Guards

TAGASHIRA Kentaro

This article examines the characteristic features of the Jinwuwei 金吾衛 Regiment, one of the Twelve Imperial Guards (Shi'erwei 十二衛) units in China's Southern Command (Nanya 南衙) system from the viewpoint of its relationship to the military command authority of the Tang Period Emperors. The author's findings are as follows.

First, the Jinwuwei was integrated into the emperor's military command and was the Imperial Guard unit that functioned to activate that authority. This special character of the Jinwuwei stems from the "yuhou" 虞候 military system of the Northern Dynasties and the Sui and Tang periods. *Yuhou* were the units responsible for reconnaissance and sentry duty, as well as command and leadership of forces in the field, supporting the authority of the high command by implementing its military law. The author argues that the Jinwuwei was an Imperial Guard unit acting in the role of *yuhou* under the command of the Tang Emperors.

Secondly, the Jinwuwei, with the principle of *yuhou* at its core, was originally formed based on the concepts underlying the nomadic military organization of Xianbei 鮮卑, resembling the Mongolian pastoral bureaucracies of *yūrtchī* and *bulārghūchī*, demonstrating, in the author's view, one occur-